Fate/Ayamatu Kensei

寿咄

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
「お前みたいだったら、よかった。お前みたいに、真っ直ぐに、何もかも救える力があれば、よかった。俺は、お前が羨ましい。俺は、お前が憎たらしい」
「君は……」
「ーー俺は、お前になりたかったよ、ラインハルト」
「ーー僕は、君の気持ちはわからない」
一夜にしてとある王国が燃えた。
『剣聖』である彼はそれを止められなかった。
『剣聖』である彼は護るべき民を護れなかった。

騎士である彼は主君を護れなかった。
それでも彼は座に登録され、今召喚されようとしていた。

目次

Fate／Ayamatu Knigh
t l

Fate／Ayamatu Knight

僕という存在は5歳の頃に全てが決定された。
ほんの些細なことで、けど家や国にとっては重要なこと。
それは祖母が持っている筈の『剣聖の加護』が僕の元にやってきたことだ。
加護は本来一代きりのもので引き継がれることなんてことはない。
けど『剣聖の加護』は特殊でアストレア家に連なる者たちからのみを選び代々引き継いでいく特性を持つ。
だからこの加護を得た時僕の残りの人生は『剣聖』として生きることになった。
不満はない。アストレア家の者としてこれは名誉であり、僕自身も選ばれたことが嬉しかった。
その後成長していきユリウスとフェリスという親友もでき剣聖のお勤めをこなしながらも日々を過ごしていた。
極秘ではあるものの王家が崩御したという話が賢人会からされた幾日もあとに『腸狩り』エルザ・グランヒルデと交戦した。噂の通り恐ろしいほど強く、僕が現場に着いた頃には何人もの衛兵が倒れていた。もちろん終始圧倒し投降を願ったりもしたが逃亡

されてしまった。
この事は騎士団長などにも伝えたが、彼らにこの件で話していないことが一つだけあった。
それは視線。僕とエルザの戦いを何処か近くから見ている視線。まるで僕に憧れ、嫉妬し、羨む視線。
視線の主人を捉える事は出来なかったが大方スラムの住民だろうと思い放置した。
……彼をここで見逃していなかったらあんな事にはなっていなかっただろう。
王戦が始まった。
出陣者はプリシア様、アナスタシア様、エミリア様、そして我が主君であるフェルト様の計４人によって行われた。
崩御を市民たちに伝えたときの慌てぶりは凄まじいものであったが、同時に新たな王に対する期待もあった。
プリシア様が王になればこの国を良くすると言った。もちろん傲慢な言い方であったもののその気迫は４人の内最も強かったと言える。彼女の騎士はアルデバランと名乗る怪しさ満点の顔を隠した隻腕の男。元はヴァルキアの剣奴であったらしい。
アナスタシア様は国を我が物とすると言った。プリシア様と似ているようで彼女の場合は所有物にするという大それたもの。彼女の気質からしてルグニカは第二のカラ

ラギのようになるのかもしれない。そんな彼女の騎士はユリウス。何故彼女の騎士になったのかははぐらかされてしまったものの関係は良好そうで親友としても安心した。

エミリア様は平等を唱えた。種族や人種で差別しない。銀髪のハーフエルフの彼女が言うと説得力があるものの、やはり周りの目は良いものではなかった。そんな彼女には騎士がおらず、後見人のメイザース辺境伯たちの雰囲気が少しばかり暗かった。なんでもメイドの1人が一月前ほどに死んでしまったらしい。ご冥福を祈るばかりである。

そして我が主君であるフェルト様は全てをぶち壊すと仰られた。格差を壊し国をやり直す。短い付き合いではあるもののフェルト様らしい意見である。

出馬表明が終了し各々が解散していき、その数日後エミリア陣営があの魔女教の尖兵『怠惰』を排したという報告が上がった。

……未だにこの出来事、特に王戦の人数に違和感を感じている。4人では無く5人ではなかったのかと。この違和感に消えたフェリス、そして『怠惰』の一件。この全てが1人の男の策略であったとこの時の僕が知ればどんな顔をするだろうか。

王戦の状況は今やエミリア陣営が圧倒している。

民生の話はあまり聞かないが、魔女教大罪司教『怠惰』『強欲』『暴食』『憤怒』『色欲』を排したのだ。それだけでも民衆からの評価は非常に高い。

ただ同時に不安もあった。

プリシア様とその従者の者たちは人知れず姿を消し、アナスタシア様も『鉄の牙』を連れて王戦を辞退された。

さらに賢人会に所属されている方々が次々に消息を断ち、ユリウスもアナスタシア様が辞退される前に人知れず消え去っていった。

残っているのはエミリア陣営とフェルト陣営。

功績から考えてもフェルト様に勝利は薄い。

けれど、それでも諦めない。後悔は全てが終わってからと仰られた。だからお前もそんな顔をするなとも。

主君が望むのであれば従うのが騎士である僕の役目である。

そしてそのお言葉のおかげで僕は今日や昨日よりも、明日はいい表情ができると確信した。

ーーその次の日、ルグニカは大火に包まれた。

＊

「……」

またあの夢だ。

騎士として、剣聖として龍と主君に近い護ると決めたモノを僕は守れなかった。

一部の民衆からは非難され、僕もまたそれを全てその身に受けた。

けれどエミリア様はそんな僕に騎士になって欲しいと仰られた。

もちろん拒否した。

騎士としての、『剣聖』としての僕は既にあの男に殺されてしまっている。

そして国を護りきれなかった僕には家名を名乗る資格もない。

故にここにいるのはただのラインハルトである。

それでもいいなら、と。

そう告げたがエミリア様はぎこちなく微笑み、なら『僕』を騎士にすると仰られた。

ならばと僕はそれを引き受け騎士ラインハルトとして新たな主君と国を老衰するまで護り切った。

そして僕は英雄の座と呼ばれる場所にセイバーのクラスとして登録された。

一度とはいえ国と主君を護りきれなかった僕には英雄を名乗る資格は無い。

けれどこれを拒否すればかつて僕を英雄と言ってくれた人々への侮辱なのではと感じた。
だから登録に素直に応じた。
そこからは未知が多く存在した。
僕が生きていた世界とは違う別の世界のこと。それを僕の座にて知ることができた。
未知の人、未知のモノ。そこにはそれが溢れていた。
けれど時間がそこにはあり過ぎた。
気づけばその未知も既に未知では無くなり、正直に言えば暇をしていた。
けれど寝る度に生前を夢に見て、起きたら鍛錬をしていたから暇ではなかった。
そんなある日、僕は初めてサーヴァントとして召喚された。
召喚されて最初に目に入ったのは炎上する街。かつての王都を思い出すが、加護が否と言う。
そして目の前には赤い髪をした少女が動く骸骨に襲われていた。
紫の髪をした少女は赤い髪をした少女を護ろうと動いているが、おそらく間に合わないだろう。
「ーーそこまでだ」
手を振るい発生した風圧だけで骸骨だけを崩す。

少女たちは急に崩れ去った骸骨に何事かと驚きながらもこちらを見てきた。
おそらく赤い髪をした少女がマスターなのであろうが、念のため聞いておくとしよう。
「……サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。問おう、君が僕の主君（マスター）かい？」